

# 石川啄木家の心理学的に見た経済感覚

川田淳一郎<sup>1)</sup>・吉田千代子<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>基礎教育課程

<sup>2)</sup>函館市立文学館

## Psychological Economic Sense of Ishikawa Takuboku's Family

KAWADA Jun-ichiro, YOSHIDA Chiyoko

<sup>1)</sup>*Division of Liberal Arts and Science*

<sup>2)</sup>*Hakodate City Literature Museum*

(Received November 13, 2000 ; Accepted January 19, 2001)

### 1. まえがき

石川啄木は文学的才能を持ち合わせながら、その才能を十分発揮し尽くせぬまま病魔によって他界してしまった。しかし、厳密に言えば病魔のみでは無く、彼の生育環境によってもたらせられたと思われる心理学的欠陥による抑圧によって、その持てる才能を十分に発揮できず他界してしまったと言うべきであろう。啄木は歌、詩、小説及び文学評論を得意としたが、彼が最も熱望した小説は文学社会にあまり高い評価を受ける事が出来なかった。それは既に述べたように、彼の心理学的欠陥即ち「自我と他我のインバランス」にあったからである。(川田「悲劇の詩人石川啄木論考・1999年9月・東京工芸大学基礎教育論叢」)啄木は27年と言う短い人生で5000首弱の短歌を残したが、自分ではその短歌を「悲しき玩具」と言って自分の文学ターゲットと考えていなかった。しかし彼にとっては皮肉とも言えるように、啄木の小説に対する評価は「いまいち」だったのである。従って書いても書いても小説は出版社に買われず、唯一「鳥影」だけが買われた。しかし、それも高い評価を得るには至らなかった。生活は困窮を極めていた。そこで啄木は、あらゆる知人、友人、恩師、勤め先等から借金をしまくった。その額は1,372円50銭（現在の貨幣価値で3,000万円弱、自分の家族を面倒見て貰ったことを金額換算したら、恐らく3,000万円以上にもなるもの借金をしたのである。しかも、この大金の借金をせいぜい7年間でしたと言うのが世人を驚かせるのである。何故そのような多額の借金を、約7年間の様な短期間にせざるを得なかったか。これは、啄木研究をしている諸賢の疑問の一つとされてきたのである。これは誰が考えても不思議としか言い様が

ないであろう。もっとも、昭和の終わりから平成のこの方の、所謂バブル経済時期では数億円、数10億円と言う借金または収賄金が動いたが、これらは政治絡みであった、個人の生活費の範疇ではない。この問題については、諸賢が疑問に思いつつも今迄に殆ど議論されて来なかった。筆者の知る限りでは、啄木の朋友である宮崎郁雨が彼の著書「函館の砂」(昭和35年11月5日・東峰書院)の中で、166～172ページに渡って「啄木の借金メモ」を項立てしているに過ぎない。それにしても、啄木の借金についての内容の理由説明は全くなされてない。

筆者はこの異常な啄木の借金について、説明のメスを本報で加えることを目的としている。

### 2. 石川家の経歴と経済感覚

啄木の経済感覚を討論する前に、大切なことは啄木が何故その様な膨大な借金をする様になったかの背景を考える必要がある。その為には背景として啄木の家系から検討せねばならない。先に筆者は啄木の父親と母親の誕生から生育、結婚までを自著論文(「悲劇の詩人石川啄木論考・1999年9月、東京工芸大学基礎教育論叢」)で述べている。

啄木の先祖からの家系歴は岩城之徳の「石川啄木伝1993年・筑摩書房」に詳しいので、それに譲ることにする。啄木の父親石川一禎は嘉永3年4月4日生まれで、貧しい農家で母親エツが後妻でしかも連れ子でもあり、既に先妻の男の子が4人もいたのでまともな教育が受けられないし、先妻の4人の子供たちのいじめにあうかもしれぬと、大泉院に5歳で預けられた。そして17歳の歳で得度している。5歳にしろ、17歳にしろ今日の子供と違って明治初期ごろの子供は大変幼いものであったか

ら、子供心にも大変な苦勞、努力であったろう。著名な作家である水上 勉は、彼の著書「雁の寺」で幼くしてお寺に預けられた子供の生活について詳しく述べている。同氏はやはり幼くしてお寺に預けられ成長した経歴の持ち主であるため、その生活経験と心情は実に良く表現されており、本報を纏める際にも大変参考になった。お寺では、たとえ5歳の子供でも寺修行として、掃除、片づけ、簡単な洗濯および毎朝の勤行等が日課であった。掃除と言っても広いお寺の事であるから、秋の落ち葉掃きや広く長い廊下の雑巾掛け等、ましてや身を切るような寒い冬ではその辛さに、手にあかぎれを作り毎朝泣きながらやったようである。17歳で得度してからは、本格的な仏道修行が始まる。このようにして成人するまで同年代の子供たちや少年たちと遊ぶ事等全く許されないのである。同年代の子供たちが、飴や菓子を親に買って貰って嘗めているのを横目で見てどんな気持ちでいたか、子供たちがお寺の広い庭で楽しそうに「ごっこ遊び」をやっているのをどんな気持ちで見ていたか、そして育てて行ったか。これこそ本人でなければその悲しさ、悔しさはわかるまい。勿論お小遣い等は貰えないのである。着る物は洗い晒しの墨染めの小坊主用の衣である。勿論着たきり雀である。無教育の住み込み人が一人前の僧侶になるための修行は、親持ち経費で仏教大学を出るのは訳が違うのである。そのためには、あらゆる欲望を絶って修行をせねばならないので、途中で脱落してしまう者もいる位である。このようにして読み、書き、各種經典の学習、葬儀・法事・慶弔の作法、戒名の作法及び人心の指導からお寺の檀家との付き合いから経営、本山宗務局との関係等総てを学びとって行かねばならない。彼の師僧は葛原 対月と言う南部藩の士族出の高僧であり、また学僧であったから厳しい中にもそれなりの実りのある生活であったろう。このようにして成人して行ったが、彼が25歳の時、師僧葛原対月の取りなしで対月の妹カツ28歳を伴い日戸村の日照山常光寺の住職として赴任して来た。学歴の全く無い啄木の父親が25歳の若さで一寺の住職となれたのは、妻カツの兄で師僧でもある葛原対月の推挙があったからの事であろう。

啄木の父親の背景歴を簡単にまとめてみたが、これを見ても判るとおり明治初期のお寺での修行者生活は、俗人である我々にとっては想像も付かないものであったようである。

さて、筆者がここで問題にしたいのは、その様な一般社会生活と異なった閉鎖社会で育った人間は心理学的には、一般社会で育った人間と比較した場合とどう差異があるかと言う事である。これについては筆者が既に先出の論文で触れているが、人間の成長期で最も大切な幼

年期に次ぐ少年期がこれに当たる。実験的に見ても、人間でも犬猫の様な動物でも、幼年期および、少年期に同じ子供社会での遊びの中に於いて彼らの人格形成がなされて行くのである。動物では同種動物社会での順応性を体得するのである。子供社会でお互いの立場を理解し合う事によってその年代に相応しい「自我と他我」および「責任感、権利の主張」「自分と他者の関係」等次の世代即ち青年期に入って行く「自信と権利、義務と社会性」が自然と備わって行くのである。従ってこの期間に大切な子供としての心理学的発達のパランスが十分にとれずに青年期に入ることになる。昔から宗教家に頑固者が比較的に多いと言われる所以がここにあるのである。個としての成長は、己の厳しい修行で研ぎ澄まされるが、他に対する成長はどうしても発達不足になってくる。この場合、修行の内容が非常にパランスのとれたもの、たとえば、一般社会の人情の機微に触れたものが十分になされていれば、例えば子供同士の遊びが無くとも間接的経験によってある程度補われて行くものである。これが教育の効果なのである。教育の重要さは、教のみでは幾らやっても人格や人間関係の成長を期待する事は出来ない。育があってパランスよい教育の上に始めて効果的な人間形成が出来る。この間の学問的所産が発達心理学である。

この観点から観ると、啄木の父親は心理学的精神発達に問題があると思われる。この問題については、筆者がすでに前出の論文で述べている。筆者は自我の発達とパランスのとれた他我の発達を重要視している。他我の発達不足の人間に「己を取り巻く他、即ち社会との良好な関係」「他への思いやりの心」を求めてもこれは無理と言うものである。啄木の父親自身はかなりの能力の持ち主と筆者は観ている。しかし、後に明治20年の宝徳寺に転任の際における檀家間の揉め事（前任住職の家族の追い出し）や寺財産の山林無断売却（売却代金130円、現在の貨幣価値で約156万円）による檀家との責任問題事件等は、当然起こるべくして起きた問題であり、個人的能力のある啄木の父親が何故このような問題を起こしたのか、訝る者も筆者ばかりではあるまい。また、明治37年12月26日づけで宗務局より長年の宗費滞納（滞納額113円、現在の貨幣価値で約130万円）の責任を問われて寺より追放される事になったが、これなども当たり前の事が当たり前に起きた事件であり、何故前もって適当な処理が出来得なかったのかが不審に思える。これは心理学的には容易に理解出来るのである。つまり、他我の発達不足の人間から観れば、この程度の事であれば問題にされまい、または問題にならないであろうと言うように、自分の都合の良いように勝手な判断を下す傾向がある。その結果「無責任」、「他人の痛みの判らない人間」と言う

事になる。

さて、今までは啄木の父親についての生育と心理学的分析を試みて来たが、啄木の母親カツに付いて考えてみよう。カツが結婚した時の年齢は28歳と当時としては極めて遅い。明治初期では、女性の地位は大変低く、農家では農業の働き手、跡継ぎの子供を生ませるための嫁取り程度にしか考えられないと言ってもやぶさかでは無かった。したがって結婚年齢が小学校高等科を卒業した頃、即ち17歳乃至は19歳ぐらいが普通であった。その様な時代に28歳で結婚と言うのは異常であって、その歳では後妻の年齢であった。筆者は、カツの兄葛原対月師が出遅れた我が妹にしてあげられた思いやり、つまり自分の仏弟子との結婚及び常光寺住職の大黒（住職夫人）の地位であると考えている。宮崎郁雨の前出著書「函館の砂」には、対月師が「一禎とカツは恋愛結婚だから、近くより遠くの山寺が新婚の庵として良からう」と言ったとあるが、これは啄木得意のフィクションを聞いての事であろうと筆者は思っている。啄木の母カツは葛原対月師の妹である事はすでに述べたとおりであるが、対月師は南部藩士族工藤一族の出であり、石高こそそう高くはなかったが、れっきとした南部侯に仕えた武士の一族であった。したがって廃藩置県、士農工商の廃止、武士の帯刀禁止令が出された明治初期にあっても、士族階級はれっきとして残っていた。日戸村の様な地方の片田舎では、士族を名乗れる者は一村に一人いるかないかと言うものであったろう。したがって啄木の母カツの気位の高さは相当なもので、恐らく村の貴族と言う感じであったろうと想像出来る。しかも所謂「3歳年上の姉ちゃん母ちゃん」である。筆者は東京生まれであるが、戦災被害で埼玉県に疎開し、土地の高校を出た。それでこの啄木一族に似たような家族を見知っている。その一家で母親は「かかあ天下」であり、自分の亭主は平民農民なので見下しているように見えたものである。

さて、ここで問題なのは、その様な場合の家庭では亭主がどうしても控えめである事、妻が見栄っ張りである事である。これは何処に行ってもその様な話を聞くので共通した社会現象と言えよう。その結果「無い袖を振る」と言う事になる。亭主がきちっと自分の妻をコントロール出来る場合には問題がないが、そうでない場合には「武士は食わねど、高楊枝」と言っている内は良いが、気取った生活をする様になると当然貧乏寺の経済状態はおかしくなって来ることになる。「蟹は甲に似せて穴を掘っている」であれば問題が無いが、啄木家では彼を寺の跡継ぎ住職にしようと言う気配は、多くの文献に当たってみても一つとして無いのである。啄木の両親は彼を跡継ぎ住職にする向きは全く無かったと筆者は想像している。

これは啄木自身にも全く無かったと判断しても良からう。

このようにして啄木は気位の高い母親の教育と、姉妹の中の男一人で姉妹に対して暴君的存在であった。しかも母親から観れば40歳にして始めて授かった男の子で、学校の成績が良かったとなれば目の中に入れても痛くないと言う様になる。これは後に、啄木の妹三浦光子の「兄啄木の思い出」(昭和39年10月理論社)に母親の盲愛ぶりが述べられている。啄木の家庭経済状況から観れば、盛岡中学進学はまず無理な状況であったのに、これを実行してしまった事が啄木一家の後々の不幸の始まりと言ってもよからう。啄木の両親は啄木を寺の跡継ぎとして教育し、啄木を宝徳寺の住職としたら「悲劇の啄木一家」は無かったと筆者は想像する。したがって、この成り行きにブレーキを掛けるかハンドルをきれる人間が啄木の父親か、または母親のいずれにかがその役割を果たせなかった事が最大の問題であった。これは心理学的にみると、既に啄木の家庭は舵の無い船に例えられ、言うなれば家庭崩壊状態にあったとも言えよう。啄木の両親のどちらかに妥当性のある家庭生活のイニシアチブをとれる者がいれば、先の寺財産の山林無断売却および、長年の宗費滞納の様な愚かな事は防げたはずである。石川家は二代続いた心理学的欠陥家庭のため、社会生活の三者関係のまずさ、および旧士族の社会的見栄等のため、不必要な経費を必要とした。金田一京助の日記にも自分は定収入のある身でも安煙草を吸っているのに、啄木は収入も無いのに高級煙草を吸っている見栄坊さを記している。

### 3. 啄木の借金メモ

啄木の人生は借金に明け、借金に暮れたと表現出来る様なものであった。したがって啄木書簡の多くは借金の申込みと、借金の返却猶予願いであったと言えよう。このような状態な啄木生活に触れた諸賢は、唯一啄木の朋友であり義兄弟の宮崎郁雨を思い出すであろう。彼は自著「函館の砂」166ページ～172ページに啄木がしたためた借金リストを載せている。これは函館市立図書館の「啄木文庫」に保管されている啄木の借金リストをコピーしたものを補遺して載せたものである事が述べられている。先ず函館市立文学館に展示されている啄木の借金リストの筆者による模写を示す。

郁雨の補遺した啄木借金メモをつぎに示す。

#### 「啄木借金メモ」

(この写書中一 一間の文字は宮崎の書き入れである)

「啄木借金メモ」は郁雨が自著でつけた呼び名であるが、現在では啄木研究者の間で通称となっている。「啄木



|                      |        |
|----------------------|--------|
| 沼一沼田清民一              | 7円00   |
| 小計                   | 154円   |
| <b>(盛岡)</b>          |        |
| 堀合一忠操、岳父一            | 100円00 |
| 清岡一等一                | 10円00  |
| 大信田一金次郎=落花           | 80円00  |
| 大矢一馬太郎一              | 10円00  |
| 川越一千代治一              | 5円00   |
| 長岡一広一                | 3円00   |
| 小笠原一兼吉=迷宮            | 15円00  |
| 高野一俊治一               | 10円00  |
| 工藤一寛得又は大助            | 10円00  |
| 一一家賃一                | 40円00  |
| 小計                   | 283円00 |
| <b>(仙台)</b>          |        |
| 土井一晩翠一               | 10円00  |
| 大泉一旅館一               | 7円50   |
| 小計                   | 17円50  |
| <b>(北海道)</b>         |        |
| 山本一千三郎、次姉の夫一         | 100円00 |
| 宮崎一大四郎=郁雨一           | 150円00 |
| 西掘一藤吉=秋潮、東京新詩社社友     | 2円00   |
| 大塚一信吾=薪吾一            | 5円00   |
| 和賀一市蔵=峰雪一            | 15円00  |
| 松阪一運吉                | 15円00  |
| 小樽一家賃?一              | 10円00  |
| 佐田一備則、小樽日報記者一        | 6円00   |
| 小国一善平=露堂、北門新報記者一     | 5円00   |
| 関サツ一釧路下宿屋一           | 50円00  |
| 坪一近江仁子=小奴一           | 25円00  |
| 俣野一影吉、釧路病院長一         | 4円00   |
| 日影一安太郎=緑子、釧路新聞主筆一    | 5円00   |
| 佐藤一国司=南畝、釧路新聞社顧問一    | 10円00  |
| クシロ本屋一               | 16円00  |
| Oコー希望楼、釧路料亭一         | 7円00   |
| シャモ一軍鶏寅、同上           | 12円00  |
| 鹿島屋一同上一              | 22円00  |
| 料理や一                 | 4円00   |
| 遠藤一隆、釧路第三小学校訓導、弥生校同僚 | 15円00  |
| 在原一清治郎、小樽日報記者        | 5円00   |
| 小計                   | 483円00 |
| <b>(東京)</b>          |        |
| 佐土原町一下宿、井田芳太郎一       | 25円00  |
| 大和館一下宿一              | 70円00  |
| 大館一同上一               | 30円00  |
| 金田一一京助=花明一           | 100円00 |

|  |            |
|--|------------|
| 栗原一元吉=古城一  | 5円00       |
| 北原一白秋一   | 10円00      |
| 太田一正雄=木下李太郎一   | 1円00       |
| 藤条一静暁、新詩社社友一   | 1円00       |
| 平野一久保=万里一  | 1円50       |
| 同  | (本) 4円00   |
| 並木一武雄=翡翠一  | (時計) 9円00  |
| 熊谷一矢兵衛一  | 2円00       |
| 平出一修一  | 11円00      |
| 堀合一由己一   | 1円00       |
| 小山内一薫一   | 3円00       |
| 長谷川一誠也=天溪一   | 3円00       |
| 細川一芳之助一  | 15円00      |
| 吉井一勇一  | (インバ) 2円00 |
| 浪岡一茂輝一   | 1円00       |
| 藤岡長和一新詩社社友一  | 3円00       |
| 小計   | 297円50     |
| 中野一?一  | 1円50       |
| 田沼一甚八郎一  | 5円00       |
| 柴内一陸一郎一  | 1円00       |
| 蓋平館一東京下宿屋一   | 130円00     |
| 小計   | 137円50     |
| 合計   | 1372円00    |
| この借金リストを見ると、75名の名前がある。よくもまあこのように借金したものと驚くが、郁雨も述べている様に、かなり借金者名と金額の落ちているのが筆者の検討でもある。これらを筆者の調査分として加えた金額が次の様になる。 |            |
| <b>明治38年2月以降</b>   |            |
| 福場幸一(電車賃・煙草代その他) ……………   | 約3円        |
| <b>明治39年3月</b>   |            |
| 太田駒吉(渋民帰村のため) ……………  | 20円        |
| <b>明治41年</b>   |            |
| 小奴(洋服新調代として) ……………   | 23円        |
| <b>明治41年7月、8月、10月</b>  |            |
| 与謝野鉄幹(生活援助として) ……………   | 15円        |
| <b>明治45年</b>   |            |
| 夏目漱石夫人(病気見舞いとして) ……………   | 10円        |
| <b>明治45年2月7日</b>   |            |
| 金田一京助(生活費援助として) ……………  | 10円        |
| 小計   | 81円        |
| 借金その他 合計   | 1,453円00銭  |

#### 4. 啄木の生涯収入金額

啄木は彼の生涯収入として、一体どの位の金額を手

したのであろうか。筆者が調査した所では次のようになる。金田一京助編の年譜（石川啄木・改造社・昭和3年7月10日・現代日本文学全集・第45巻）および岩城之徳編の年譜（石川啄木伝・筑摩書房・1993年4月15日）を基にして、啄木の職業と勤労収入を一覧表にまとめてみよう。

|              |     |                             |
|--------------|-----|-----------------------------|
| 明治39年 4月     | 21歳 | 渋民尋常小学校代用教員……手当8円（月当たり）     |
| 明治40年 4月     | 22歳 | 同校罷免……この間収入 合計104円          |
| 明治40年 6月     | 22歳 | 弥生小学校代用教員……月収12円            |
| 明治40年 8月     | 22歳 | 同校退職……この間収入 合計36円           |
| 明治40年 8月     | 22歳 | 函館日々新聞社記者……月収15円            |
| 明治40年 9月     | 22歳 | 小樽日報記者……月収25円               |
| 明治40年12月     | 22歳 | 同社退職……この間収入 合計100円          |
| 明治41年 1月     | 23歳 | 釧路新聞記者……月収25円               |
| 明治41年 2月     | 23歳 | 小説「病院の窓」原稿料……収入22円70銭       |
| 明治41年 3月     | 23歳 | 同社退職……この間収入 合計75円           |
| 明治41年11月     | 23歳 | 毎日新聞小説「鳥影」……収入120円          |
| 明治41年 3月     | 24歳 | 朝日新聞校正係……月収30円              |
| 明治41年10月     | 24歳 | 歌集一握の砂……収入20円               |
| 明治45年 1月     | 27歳 | 朝日新聞社内有志17名見舞・収入……34円40銭    |
| 明治45年 4月     | 27歳 | 歌集「悲しき玩具」……収入20円            |
| 明治42～45年 4月迄 |     | 朝日新聞社よりのトータル収入 ……………430円20銭 |
| 啄木の勤労所得…………… | 合計  | 977円30銭                     |
| 啄木の借金……………   | 合計  | 1,453円00銭                   |
|              | 総合計 | 2,430円30銭                   |

## 5. 啄木の収入と生活についての考察

啄木の人生27年間の勤労所得977円30銭、啄木の借金1,453円銭で、収入総合計は、2,430円30銭であるから、啄木の勤労所得は全体収入の約40パーセントで、借金が

60パーセントとなる。即ち啄木のトータル収入の約60パーセントが借金であり、それらの収入で生活してきた事になる。啄木が20歳で結婚し、27歳で他界する迄の7年間の勤労平均月収は約11円20銭（現在の貨幣価値で約168,000円）であり、この月収で五人家族が生活するのはとても無理であり、その結果毎月平均27円50銭（現在の貨幣価値で約412,500円）の借金をせざるを得なかったわけである。これで月当たり生活費は38円70銭（現在の貨幣価値で約580,000円）である。現在でこの平均月収は、大学卒で25年以上の勤労者（45歳以上）の収入となろう。啄木の26歳、旧中学5年中退者の月収としてはあまりにも大き過ぎる。事実、金田一京助は東京帝国大学文学部卒で海城中学（旧制）教員であったが、月収は40円（現在の貨幣価値で約60万円）、夫婦と子供一人の家族で何不自由無く生活しているのである。その当時は帝国大学を卒業する者はめったにいなかったから、卒業して2～3年でこのような多くの収入が得られたのであろう。

何故啄木の場合は、ほぼ同世代の金田一とその様な生活上の違いが出てしまったのであろうか。

この理由は単純である。啄木と金田一の生活設計が根本的に違っているからである。啄木の場合は成人者としての人生設計らしいものは殆ど見当たらないのである。宮崎郁雨が彼の著書「函館の砂」で言っているように、「先ず己の生活の基礎をしっかりと築いてから、十分な計画を立て、その上で目的行動を起こさねばならない。」啄木の場合にはこれが全く無い。従って直情傾向の啄木のやることは、総てが失敗であった。特に状況が悪かったのは、啄木の性格が自己顕示欲、自惚れが強く、ワンマン亭主であった事で、心理学的な面から見ると生活不順応者であった事である。節子夫人はその点から見るとかなりな人格者であったから、啄木が節子夫人と十分話し合っていて行動していれば、これ程の無残な失敗を避けられたのではないかと筆者は想像する。たとえ、啄木の母親が17歳で結核を患ったとしても、当時は体力があり、この歳66歳になるまで生き長らえていたのであるから、結核が自然治癒していた可能性も考えられる。そうであれば、啄木が結核一族としての悲劇を避け得たことであろう。事実、啄木の父親は一緒に生活をしていたが肺結核に感染しておらず、78歳という当時としてはかなりの長命を全うできたのである。

## 6. 何故啄木は借金が出来たか

啄木研究の諸賢は、何故無収入で無財産の啄木がこの様な多額の金額を借金できたかを疑問に思われている事であろう。啄木の性格を心理学的に見ると、彼の幼年期および少年期の生育状態に支障があったため、発達心

理学で言われる幼児性を抜けきれずに青年期に入ってしまったところに問題があった。まず、啄木の借金申込みの手口を見よう。

- (1) 原稿が売れたらすぐ金を返せるから貸してくれ、  
…相手に安心感を与える。
- (2) 話術が大変うまい  
…相手を自分のペースに引き込むのが上手である。
- (3) 啄木は心理学的にみて、二重人格性がある  
…自分が悲劇の主人公になりきれぬ。
- (4) 容貌が弱い坊ちゃん風である  
…相手の同情を受けやすい。
- (5) 文学者としてある程度の知名度があった  
…相手の信頼を受け得る要素があった。
- (6) 借金の手口が堂にいている、  
…土井晩翠夫人から借金の場合、自分の妹になりすまして自分宛の手紙を書き「母親が重い病気が金が無く、医者にもかけられぬ」とあるのを見せ、同情をかって10円借りている。

以上の様な特徴があり、これらが借金をする上にプラスに働いていた。一方で啄木のしたたかさがあった。

- (1) 無産で、しかも常に無担保借金を平気でやれた。
- (2) 月給の前借りを毎月やれる度胸があった。
- (3) 他人から拝借した物を質屋に入れるずうずしさがあった。
- (4) 金が無い上に、また入る当ても無いのに掛け売りで物を買う癖があった。
- (5) 貧しい若輩者でありながら、洋風のステッキを持ち格好を付けていた。当時ではステッキを使用する人は、ハイカラなそれなりのステイタスを持つ階級の使用する物であった。
- (6) 金が無いのに敷島煙草（当時最高級品）を吸っている。

これらの性癖は啄木の心理学的な欠陥の代償行動の現れである。このような性癖のため、啄木は多くの友人、先輩、後輩、恩師等の大切な人脈を失っている。それは啄木を巡る人々が啄木の才能を惜しむがために金を貸したのだと言う言葉を聞くが、それも一部にあると思うが、明治初期の日本の情勢および岩手県の当時置かれていた状況と県民性、同窓生としての連帯感等が相乗した結果も大きく働いていると考えねばならないであろう。

## 7. 本稿のまとめ

石川啄木は「悲劇の詩人」と言われる理由を彼の生活面、特に啄木家を心理学的に見た生活および経済感覚と

して捉え、分析的に検討・考察を加えて来た。我々第三者は、啄木の総てを客観的にクールな感覚で見ることが出来る。しかし、啄木のように心理学的にその成長過程で自我と他我のインバランス、体格自我と体格他我のインバランス性、つまり結果的には幼児性の強い人間にとって、自分を客観的に見られにくいと言う事が彼の最大の欠点となってしまった。これが自分の自己点検、自己評価、自己改善とならなかつたのである。従って彼の作家としてのより完成へのダイナミック・パワーが得られず、常に未完成的ジレンマを引きずって彷徨い、生活面でも啄木の無計画さが家庭生活経済の破綻となってしまった。家庭生活経済の破綻は、貧苦の毎日となり、食生活の貧困から栄養失調はては肺結核の罹病と進み、ついに啄木、および節子夫人の病没と言う痛ましい結果となってしまった。

芸術家や文芸作家にはこの啄木の様な人生破綻者をししばしば見る事が出来る。我が国では芥川竜之介、太宰治、三島由紀夫、坂口安五、外国ではバン・ゴッホ、ヨハネス・ブラームス、イリッチ・チャイコフスキーその他挙げたら切りのない位名前が出てくるのである。いずれも悲劇の芸術家といわれる所以である。

啄木の歌集「悲しき玩具」に次の様な歌がある、

何故かうかとなさけなくなり  
弱い心を何度も叱り  
金かりに行く

と言うのがある。これから見る限りいかにも心弱そうな表現をしているが、彼の日記には「金を借りについて自分の話が上手だったので25円も借りられた、しめしめ」等と言うしたたかさを持っている事を見過ごしてはいけない。またこのように、啄木の経済感覚は彼のみの特徴でなく、彼の育った環境、即ち啄木の両親の生育状況と性格、および啄木の生育環境に根ざしていた事を見落としていたのである。啄木研究者の論文に、彼が借金メモを残しているのを、「啄木は将来において十分な蓄えが出来たあかつきには、己の借金を返すつもりでいたのであろう」と宮崎郁雨は述べているが、これは宮崎の様に心理学的バランスのとれた一般人の感覚であって、啄木の場合には必ずしも当てはまるものではない。金に困り1円50銭借金した帰りに、1円を投じて早速煙草と煙草入れを買ってくる、また宮崎郁雨の元で厄介になっている家族への仕送りのため25円借金したその足で浅草の女郎屋通いをする無見識な啄木には、とても借金を総て返却する様な殊勝さは感じられない。若し本当に借金を返す心ずもりならば、小口借金をした人総てを網羅してあらねばならないはずである。煙草代、電車賃、インク代、

切手代、昼飯代原稿用紙代等をちよくちよく小口借金をした人は、相当な人数にのぼるはずであるが、これらはまったく無視している。啄木の人柄からみると、将来もっと金を借りる場合の参考資料としたかもしれない。

#### 参考文献

- 1) 石川啄木集・現代日本文学全集・第45編・昭和3年改造社発行
- 2) 石川啄木伝・岩城之徳・筑摩書房・1993年4月15日発行
- 3) 青年心理学・間宮 武・三友書房・1955年5月26日発行
- 4) 函館の砂・宮崎郁雨・東峰書院・昭和35年11月5日初版発行
- 5) 石川 啄木の手帳・学灯社国文学編集部・昭和53年11月15日発行

- 6) 啄木と渋民・遊座昭五・八重岳書房・昭和46年4月15日発行
- 7) 啄木写真帳・吉田 孤羊・藤森書店・昭和54年4月15日復刻発行
- 8) 悲劇の詩人石川啄木論考・川田淳一郎・1999年9月東京工芸大学基礎教育課程論叢
- 9) 石川啄木・堀江信男・おうふう・2000年3月5日発行

#### 謝 辞

参考文献として使用させて戴いた著者の諸先生方、岩城之徳氏、間宮 武氏、宮崎郁雨氏、遊座昭五氏、吉田孤羊氏、堀江信男氏に深甚の感謝を申し上げます。